

内外交差点

「謙遜の美德」より魅力の発信を 「タクシー+観光」の可能性②

森田 玲子氏（姫路タクシー社長） 第2/12回

ある春の日に、8名の仲間と倉敷美観地区と直島を訪れた。私が属している姫路商工会議所の観光委員会の視察である。

昨今、日本の地方都市の最大の課題は、少子高齢化に伴う人口減少であろう。若者は東京へ極集中し、地方は限界集落を多く抱えている。姫路市の場合、中心部では増加傾向にあるが（2019年調べ）そこからたった十数キロの地域の減少は止まらない。若者にとっての魅力的なまちづくりは最も力を注ぐべき課題である。そんな中、2022年に松本市（長野）倉敷市（岡山）福山市（広島）北九州市（福岡）姫路市（兵庫）の5市の会議所は広域都市連携事業の提携を結んだ。旗振り役は我々、姫路商工会議所。これら5市は「県下第2の都市」「ものづくり産業が盛んな工業都市」そして「歴史的資産を持つ都市」——という共通点を持つ。

姫路市は長年ある課題を抱えている。それは世界遺産・国宝姫路城の観光都市というイメージが余りにも強く「ものづくりのまち」の認知が低いことだ。実際に私も県外で「姫路タクシーの森田です」と自己紹介申し上げると「観光でタクシーは忙しいでしょう」と言った返答が殆どである。実際のところ観光も増加しているが、産業関連の需要が圧倒的に多い。

観光都市である事がマイナスである要素は全くないが、ものづくり産業が盛んであるというのは若者が働く場所が観光に偏ることなく存在するという事で、さらに魅力が増す。そういう訳で5市はそれぞれの地域の課題や先進的な取組みの事例を共有して交流を図り、全国に情報発信していこうとの約束を結んだ。今回はその一環の視察である。

まず倉敷美観地区をご案内いただく。実は2年前に所用があり彼の地を訪れた。当時はコロナの只中ということで街ゆく人もまばら、お店も多くが閉業、コロナの打撃を他都市でも目の当たりにした。蔵の白壁に不安が投影される…それが2024年、悲嘆に暮れて歩いた倉敷の風景は眩しく一変していた。メインから離れた所でも多くの人、若い店がひしめき賑わっている。江戸時代に天領であった倉敷の栄華をも彷彿とさせる見事な復活で

ある。姫路と違った観光都市を大いに満喫した。

視察後、倉敷商工会議所へ移動し、倉敷観光委員会のメンバーと意見交換を行った。そ

の中で彼らがこれほど素晴らしいまちを「確かに美しいがこれしかないのです」「大原美術館は常設展示だけで企画展がない」と言われた。この表現を私はよく理解した。正にこれは姫路市にも思い当たる点で「姫路には姫路城しかない」と言うフレーズは、姫路市民の口からよく聞かれる。悲しいかな駅に待機するタクシー乗務員にもこの傾向はあり、姫路城の他にオススメは？との乗客の問いに「いやあ、姫路は姫路城だけです」という返事をしてしまうのである。

それは何故か。確かに日本には古来「謙遜の美德」というものが存在する。しかしグローバルな観光戦略の中にあつてこの精神性は殆ど通じず、単にネガティブと捉えられる。

我が家は息子の小学生時代をベルギーで過ごしたが、ある時ベルギー人教師に「日本人に子供の欠点を尋ねると止まる事なくあげつらうのに、長所を聞いた途端に言葉に詰まるのはなぜ？」と問われた事がある。虚をつかれた。例に漏れず私も「うちの子はだらしなくて…」と言うのが常である。理由付けとして私は日本の謙遜の美德について説明した。贈り物を差し上げるときは上等な品でも「つまらないものですが」と申し添える等の例を挙げたが、彼女は理解できない。良い物を贈るのに「つまらないもの」などと言われたら、なぜつまらないものを人に贈るのかと思ってしまうわ、と言う。確かにそうだ。以降贈り物をする場合「私はこれが大好きなの」という言葉を添えるようになった。

今、観光に関しては如何に我がまちの良さを相手に伝えるかが重要だろう。一瞬の視覚に訴えるSNSの存在意義の大きさをや計り知れない。「うちなんて」と謙遜している時間はない、その間に彼らは他所の情報収集をする。いくら郷土愛があっても謙遜しては伝わらないのだ。それよりそこに暮らす人々から「倉敷ほど歴史と富に溢れた美しいまちはありません」「常設展示にあるエルグレコの受胎告知は傑作です」と自信を持って言われた方が当然関心は高まり行ってみたいと思うだろう。魅力を一層増した倉敷。今度は寒い頃に行って、ゆっくりと倉敷民藝館を鑑賞しよう。

